

事しあらば

小泊瀬山の

石城にも

隠らば共に

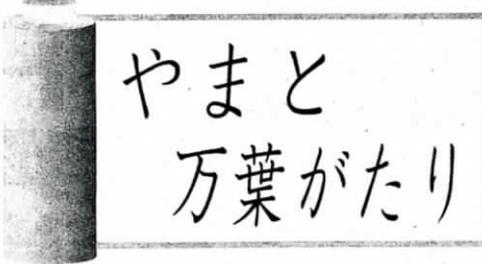
な思ひわが背

娘子(巻十六・三八〇六)

『万葉集』巻十六に
いわれのある歌として
収められたこの歌に
は、次のような左注が
付けられています。

「ある時一人の女が
おり、父母に内緒で男
とつきあっていた。
男は女の親に責めら
れるのを恐れて弱気な
なつたので、女はこの
歌を作って男に贈っ
た」

く交際する悩みを歌っ
た歌は『万葉集』に多
くあり、恋に悩む男女
が人目を避けて隠ると
いう表現もよく見られ
ますが、この歌では隠
る場所が「小泊瀬山の
石城」とされています。
よく似た歌が『常陸国
風土記』(現在の茨城
県域の地名や伝承を
集めた地誌)の新治郡
笠間村(現在の茨城県
笠間市付近)の項にも



見え、「言痛けば小泊
瀬山の石城にも率て隠
らなむな恋ひそ我妹」
(世間がうるさいの
で小泊瀬山の石城に
あなたを連れてこもろ
う、だから恋ひ悩まな
いで、あなた)とあり
ます。小泊瀬山とは
桜井市初瀬付近の初
瀬川に沿った山のこと
で、大和から遠く離
れた常陸でも歌われ
るほど、人が隠るのに

ふさわしい地として
知られていたことが
わかります。

この二つの歌には、
小泊瀬山の地名だけ
なく、男女が隠る場
所が石城であるとい
う共通点があります。
石城とは、崖などに
自然に横穴式石室を
設けた古墳は造られ
なくなつて

う説もありますが、初
瀬川左岸の山中に多
く造られた古墳時代
後期の横穴式石室を
指すとす説の方より
説得力を感じます。
歌が歌われた時代
にはすでに火葬が
広まっております。
(県立万葉文化館主
任 研究員・竹内亮)

【訳】もし何か事が起こつて、小泊瀬山の石城
にとじこもることになつたら、私もあなたと一
緒にいます。だから思ひ悩まないで、あなた。

いました。しかし、こ
うした石室が昔の埋葬
施設であるという認識
は残っており、時には
追葬という形で死者が
葬られることもありま
した。死後の空間であ
る古墳の石室に隠ると
は、男女が死ぬまで添
い遂げ、死後もまた2
人で共にいたいとい
う決意と願望を表現し
ているのではないでし
ょうか。

夕されば 小倉の山に 臥す鹿の

今夜は鳴かず 寝ねにけらしも

雄略天皇(巻九・一六六四)

所にあったと考えられています。

鹿が鳴いて妻を呼ぶ歌は多くありますが、鳴かない鹿を詠むのはこの2首だけです。『万葉集』巻一の一番歌、

二番歌の作者である雄略天皇、舒明天皇の作として、巻頭など節目の位置に重ねて載ることから、早い時期の名作として親しまれてきたことがうかがえます。

『万葉集』の最初の歌(巻一・一番歌)といえは、春菜を摘む乙女に求婚する雄略天皇の長歌です。そして雄略天皇の作とされる歌が『万葉集』にもう一首あります。

今回掲げた巻九の巻頭歌は題詞に「泊瀬朝倉宮に天の下知らしめし大泊瀬幼武天皇の御製歌一首」とあり

ます。泊瀬朝倉宮とは雄略天皇の宮で、桜井市の脇本遺跡の地にあつたと推定されています。小倉の山の場所は不明ですが、鹿がいつも臥すという習慣を詠んでいることから、この歌では朝倉宮の近くかと考えられます。その山の鹿が今夜鳴いていない、寝入ったらしいなあ、と鹿の様子を

やまと
万葉がたり

想像しています。

さて、この歌には注が続き、ある本では岡本天皇の御製というが、どちらが正しいかはっきりしないので重ねて載せる、と書かれています。

確かに巻八、秋の雑歌の最初に、類歌「夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝ねにけらしも」(巻八・

一五二二)が載っています。掲出歌と見比べると3句目が「鳴く鹿は」になっており、いつも鳴く鹿が今夜は鳴かない、と強調されています。鹿が鳴くのは妻を呼ぶためと考えられ、今夜鳴かないのは有力です。この宮は現在の「飛鳥宮跡」の場

と想像させます。少しの違いますが、雄略天皇の歌より対比が鮮明になっています。この歌は題詞に「岡本天皇の御製歌一首」とあり、飛鳥岡本宮の天皇、舒明天皇の作とみるのが有力です。この宮は現在の「飛鳥宮跡」の場

【訳】夕方になると小倉の山にやどる鹿は、今夜は鳴かない。寝入ったらしいよ。

(泉立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)